

大学生が水道の将来を考える

横浜ウォーター 城里町、茨城キリスト教大と連携

横浜ウォーターは、茨城城里町、茨城キリスト教大学と連携して、同

大学文学部文化交流学科の学生約20人を対象としたセミナーを開催した。同社が国土交通省から受託した「水道事業の啓発に向けた調査検討等及びセミナー企画運営業務」において、10月中旬にセミナーを4回開催、未来を

担う若年層に水道の歴史や現状について理解を深めてもらうとともに、将来の水道のあるべき姿や同世代へ向けた発信のあり方などを議論した。若年層の水道に対するより一層の理解の促進に向け、活動の成果は、国交省を通じて公開され国民

に向けて広報活動に活用される予定となっている。セミナー前半はインプットの時間に充て、水道事業の基本的事項や経営について学ぶ機会とした。第1回は水道に関する基本的内容や歴史についての講義を行い、第2回は城里町の水道施設を



セミナーの様子。水道のあるべき姿や同世代に向けたメッセージを考えた

見学したほか、水に関する地域文化に触れ、水と地域の密接な関わりを感じる機会とした。また、第3回の前半は国交省による能登半島地震の災害対応、横浜ウォーターによる水道事業の課題について講義を実施した。

セミナーの後半はアウトプットとして、将来の水道のあるべき姿や同世代に向けたメッセージを考えた。水道事業の課題や現状、期待されていることなどの要因を整理した後、第4回で地域社会と水の将来あるべき姿、それを実現するためどのような意識し、行動すべきか、さらに、それを同世代にどのように広げるかを議論し、最後にはそれぞれが考えた

メッセージを発表した。ある班は、将来あるべき姿は「水道料金が納得ができる」、実現のためにすべきことは「ゼミに組み込むなどより学べる機会が必要」、どう広げていくかは「確実に見てもらうためにCMやYouTubeの広告で発信する」と発表した。

セミナーの期間中には、横浜ウォーターがゲームカードの利用や、課外の時間でも学習できるようにメタバース環境を提供、座学やワークの振り返りなど効率的な学習につなげた。

久保田裕史・横浜ウォータープロジェクト統括部長の話：「セミナーは若年層の行動変容を促すため、理解に限らず、興味や関心を惹き、次の行動を考えるプログラムとしました。民間の企業診断ノウハウを活用したビジネスフレームワークを導入するなどインフラ経営を考える機会にもなりました。」

江幡守仁・城里町水道課長の話：「住民、特に将来負担を担う若者世代に理解をいただくことは中小規模水道事業体の持続に重要なことと考えていたため、今回の取り組みに参画しました。学生の反応はじめ、産官学それぞれの視点やノウハウは新鮮かつ貴重な経験となったので、今後の施策展開に反映していきたいと考えています。」

宮崎晶子・茨城キリスト教大学文学部文化交流学科教授の話：「セミナーの回を重ねるにつれ、情報をインプットすると同時に、水に対する想いも吸収し、自分たちの中で転換させアウトプットにつなげる良い循環ができました。来年度以降も、日本のどこかで若年層が水について理解を深め、産官学が共鳴しあい、将来の課題と向き合う力を育めることを願っています。」